

GRACE

喜多川雅人

「また連絡するね…」肩をそつとハグして呟く正一に、日野原公子がだまってユクリと頷いた。地下鉄日比谷線の六本木駅を出てすぐ左の細い下り坂沿いにある、その筋の粹人たちが通うイタリア料理店の出口である。

磯部正一、八十二歳。四半世紀前、同じ会社で上司・部下の関係だった公子が、六十歳で会社生活に終わりを告げたのを祝して、正一が招いた宴だ。

正一がファンだったグレース・ケリーの面影を匂わす容姿が気に入って、半年に一度ほどの頻度で、同じ店の柱に隠れた同じコーナーで逢瀬を重ねてきた仲である。二階からフロントに下りる狭いエレベーターの中で、別れのハグをして、唇を短く軽く合わせるのが限度のような付き合いといえようか。

正一のグレース・ケリー好きは病的なほどで、乗っている愛車もH社の最新型の「GRACE」だ。Graceケリーに添い寝するとても錯覚しているのかもしれない。

勤務で長い年月を欧米で過ごした正一としては、GRACEの発音はグレースではなく、グレイスであるべきと思うが、年寄りごとやかかいうまいと、毎度呟いている。

六本木から地下鉄に乗ったことまでは記憶しているが、軽い脳梗塞に襲われたのが車内で意識を失い、終点駅の日黒駅で保護された。ポケットに入っていた緊急連絡先のメモを見つけた警察から連絡を受けた老妻・美智の迎えを受けて、タクシードで神泉の自宅に戻った。以降、一人での行動は難しくなり、まもなく車椅子での介助が必要になつてきた。会話ももどかしい。

美智の方も、数年前に子宮・卵巣を摘出するという大手術をして以来、すっかり体力に自信がなくなり、正一の世話・介護どころではない。

…というわけで、それから三か月後に、正一は、井の頭線の三鷹にある介護施設で世話になることになった。

三階建てで三棟あり、同年配の男性の入居者が、上場会社で役員待遇だった正一と齟齬ない層と思われたので、商社勤めの一人息子の意見もあって、美智の判断でそこに決めたのだ。西荻窪にある息子の家から近くて、何かと便利だ。

家計にいくらか余裕があったから、シャワーはないが、トイレと洗面所が付いている十畳ほどのゆつたりとした個室を選んだ。窓からは井の頭公園の緑も望め、高さが三階建て止まりに規制されている住宅街の一角にあるから静かだ。

ベッドは、長さが日本人の平均身長より一回り大きい正一にぴったりで、シングルとはいえダブルのように幅広く、添い寝ができるほどだ。

「一人ではもつたないようなベッドだけど、お父さんは寝相が悪いから、ぴったりかもね」と美智。

「たまには添い寝してあげれば…」と、長男の正雄がぼそつと呟く。

「冗談はやめてよ、あの軒とオナラからやつと逃れられると思っっているのに…」

「一人寝は寂しそうだから、人間サイズの人形のプラモデルが添い寝するっていうのは、どうだろう」と、正雄。

「なんだか気持ち悪いけど、遊び人だった。パパにはいいかもね」

「わかった、じゃあ適当に探してくるから任せてね。入居祝いにするかな…」と、商社マンは如才ない。

準備が整い、一か月後に正一が入居すると、なんとベッドには人間大のプラモデルの女性が横たわっているではないか。白肌に薄いピンクのネグリジェを着けて、茶髪である。巧みにデザインされた唇が軽く開き、両目はうつすら閉じている。半呆けの正一は怪しく頬を緩めている。それを見て、美智が吼えた。

「なによ、これ…。何の真似？」

「親父さんはグレース・ケリーの大ファンだったじゃないで、彼女そっくりの等身大のプラモデルに添い寝してもらうのはどうかと思っつてね。ボケ防止にはこんなアイディアも意外に効くらしいよ。業者が云っていたけど、需要もそこそこあるのだから…」

「呆れた…。男っていくつになっても変わらないのね。嫌らしい。でも一人ついでのは寂しそうだから、ボケが進まないようにするには悪くないかもね、わかったわよ、了解…。」

「グレース・ケリー」の添い寝が効いたのか、正一は、しばらくは呆けが消えたような回復ぶりで、家族を驚かせた。

ところが、好事魔多しである。興奮しすぎたのだろうか、二か月後のある日、ベッドから滑り落ちた。そのショックに端を発し、足腰の衰えや、手の痺れが進み、軽い脳梗塞もでて、言動が危うく、付き添いがないと部屋からも出られない状態になった。

ときどきGRACE、グレイスと叫んで、プラモデルに手を伸ばすのが悲しい。

「いやね、男って、いくつになっても…」と美智。見舞いに来るたびに眉を顰めてぼやくてる。

「女性には分からない男の性さがとでもいうのかな」、ポツリと正雄が呟く。

部屋には、正一が愛するレナトラの歌『My Way』が流れている。『…and now, the end is near, but then again, I'm not certain…』

そして、一年が過ぎた初春のある日、介護施設の事務局からの緊急連絡を受けて、美智が、正雄夫妻と孫の正敏を同伴して訪れると、部屋には、空気が抜けたグレース・ケリーの等身大のプラモデルの左乳首を噛み切るように口にふくんだ正一が、陶然とした表情で、目を閉じて動かなかった。

ならんで横たわる美女 GRACE も空気が抜けて見る影もない。部屋には MY WAY の歌声が寂しく流れていた。

年が明けて、令和二年の元旦、磯部家には、そのことを知らない友人・知人からの賀状が何枚か届いた。

「あら、女性からも一枚来ているわ、日野原公子さんってだれだったかしら……」
(完)